

「尊厳死を決められるか？」

2013 年 8 月 18 日(日)
 会場：Alba Cafe (外苑前)
 参加：16 名
 司会・文責：堀越

1. 概要：

- ・総勢 16 名の参加者で「尊厳死」を判断する状態を具体例に、命の終焉を決められるのか、決められるとすれば誰かについて考え、対話した。

2. 対話：

(0) テーマについて

- ・今月から「死」を通じて「生」を考えたいと思っている。「死」を考えるに当たり、なるべく具体的な例として身近な他者の「尊厳死」という状況を選定した。

(1) 最初に「尊厳死」選択への賛否は？

- ・対話の前に参加者に対し、自分の身近な他者（例；家族、恋人、親類等）が本人の意志表示可否は留保したまま、尊厳死を選択するかどうかという状況になった場合に賛成できるかを訊いたところ、下記の結果であった：
- ・賛成；9 名、・反対；2 名、・不明；1 名、・保留；4 名

(2) 延命治療について

- ・死は受容できるが苦痛は耐えられないことがある。だから、苦痛を緩和する延命治療なら賛成である。
- ・言わば無意味な延命治療というものもある。誰にとって無意味かが問題だが、家族による医療費負担を考えると一概に決めることには無理があるのではないか。
- ・延命の要否という判断には、本人または周りの人にとって延命以外の何らかの意味があるはずである。それは誰のための延命なのか。

(3) 生活と命とは違う

- ・今までの議論を聞いていて疑問に思ったことであるが、Quality of Life(QOL)という場合の Life（生活）と生きるという場合の Life（命）は違う。どちらを議論しているのか。
- ・今までの意見では QOL の Life を重視した発言が多かったように思うが、"QOL"のレベルが悪いかどうかという判断を抜きに、「Life（生命）は善である」という考え方もある。意外に多くの人がこの考え方を支持しているのではないか。

(4) 命は誰のものか？

- ・話を尊厳死の選択に戻して考えたときに、誰がそれを選択できるのかという問題だが、やはり「自分の命は自分のもの」と考え、本人が選択すべきではないか。
- ・本人の意志が確認できない場合には、その意志を最も良く知っている周りの人（例：家族や親族、友人等）がそれを判断すべきと思う。そのときは、その周りの人達は必ず意見を表明するべきで、表明する権利もある。その中で一人でも「延命すべき」という意見があれば、延命治療を継続するべきである。つまり、周りの人が決めるしかない。
- ・「本人が選択すべき」という考え方は一面において説得性があるが、そのときの本人とは、成人、または分別の付く一定年齢に達した未成年という条件が必要なはずである。だが、生後数週間にしかならない新生児が重篤な病気で判断を迫られた場合には、本人の意志を確認する術はない。この場合には、どうしても周りの人達が判断せざるを得ない。
- ・仮に本人が成人の場合で、事前に尊厳死に対する選択を熟考の末に判断していたとしても、実際にその尊厳死選択のときに気持ちが変わらないとなぜ言えるのか。その最終的な判断（気持ち）を分かる術はあるのか。本人の判断が変わっていたかもしれないという余地が少しでもあれば、周りの人達には罪悪感が残ってしまう。

(5) 最後に「尊厳死」選択への賛否は？

- ・対話前と比べるため、参加者に対し、自分の身近な他者（例；家族、恋人、親類等）が本人の意志表示可否は留保したまま、尊厳死を選択するかどうかという状況になった場合に賛成できるかを再確認したところ、下記の結果であり、対話前と比べて分からなくなった人が増えた：
- ・賛成；8 名、・反対；0 名、・不明；5 名、・保留；3 名

3. まとめ：

- ・前半の対話では尊厳死自体の是非や生活(QOL)の考えに関心が多く集まったが、後半では「命は誰のものか？」という疑問に集中して対話を進められ、深めることができた。
- ・「生命は善である」という考えも途中で提示されたが充分に対話できなかったため、次の機会に対話してみたい。